

ディスカッション

●討論参加者

後藤 絵美(東京大学)／帯谷 知可(京都大学)／野中 葉(慶應義塾大学)／粕谷 元(日本大学)／

磯貝 真澄(京都外国語大学)／賀川 恵理香(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)／

カリマン・ウメトバエヴァ(東京藝術大学専門研究員)／桐原翠(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

●司会

村上 薫(日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所)

村上薫(司会) まずは二人のコメントに対して、ご報告者の方からお一人ずつお答えいただき、そのあとフロアを交えて討論したいと思います。後藤さんからお願いします。

後藤絵美 粕谷先生からは、サラフ主義の影響外のニカブの着用例について、また和崎さんからは、社会との関係の中でサラフ主義の思想に傾倒できるのかという点について、ご質問をいただきました。私の方では、サハルはサラフ主義の思想に傾倒したのではないと考えています。たまたま、サラフ主義の説教師の方法論が腑に落ちたのではないかと思うのです。その知的な論証方法が、彼女の宗教識字や論理的な考え方と合致し、その流れの中でニカブをかぶったのではないかと思われるのです。

■「サラフ主義」と総称されるものが出回り

それが腑に落ちる人が増えている現状

後藤 というのは、サハルはサラフ主義的なものすべてを一気に獲得したわけではなかったと思われるのです。たとえば夫は髭も生やしていないし、アラブ式の服も着てないし、それは問題とならない。ここで指摘したかったのは、「サラフ主義」とまとめられるような人びとの考え方や論理が出回るようになっていくこと、さらには、それが腑に落ちる人が増えているという可能性です。さらには、腑に落ちたわけではないけれど、他の理由で同じような格好をする人が増えるということもあります。もともと便利だからニカブを利用してきたという人もいたろうし、いまでもいると思います。サハルも、アパートの近所にうるさい男の人がいて、彼に顔を見せたくないから

ニカブはちょうどいい、とも言っていました。いろいろな理由があると思うのですが、今回、フォーカスしたのは、一定の論理や方法論が受容されている社会という部分です。知識が増え、メディアのチャンネルが増えていくという話は、野中さんのお話ともつながっていくのかもしれないと思いました。

和崎さんからいただいた髭に関するご質問ですが、髭をめぐる論理はきちんと押さえてみたいと思うのですが、これは女性のヴェールほど資料が見つからないのです。おそらくみんなそれほど興味がないのです。ですから、いまのところきちんとお答えできないので、次回にさせていただきたいと思います。神秘主義のほうも、もう少しそこに注目して彼の説教を聞くと、おもしろいものが見えてくるかなと思います。

■「イスラーム的なものが悪い」のか

「悪いイスラームがある」のか

後藤 皆さんのお話を聞いていて私の方でも疑問が一つと、コメントが一つ浮かんだので、ついでに挙げさせていただきます。サラフ主義的な思想が広まっているという話を私のほうでしましたが、これは、他の皆さんがされた、いくつかのイスラームが同じ国の中にあるという話につながってきます。帯谷さんと粕谷さんのトルコとウズベキスタンの話を聞いていて疑問に思ったのが、帯谷さんの報告のまとめに「ウズベキスタンの為政者たちにとってイスラーム的すぎる」という表現です。これは「悪いイスラーム」という意味かなと思ったのですが、どうでしょうか。つまりそこに「イスラーム的なものが悪い」という考え方

があるのか、それとも「悪いイスラームがある」という考え方があるのか。これはかなり違うと思うのです。イスラーム的であることそのものが「悪い」とみなされているのか、それとも「いいイスラーム」と「悪いイスラーム」という二つがあるのかというところ、トルコやウズベキスタンの状況について知りたいと思いました。

■ コーランの「ズィーナ(飾り)」をめぐる 意味と解釈の可能性

後藤 もう一つ、野中さんをご紹介されていて、和崎さんがコメントしておられた御光章31節「外に表れるものの外は、かの女らの美や飾りを目立たせてはならない」という部分についてのコメントです。ここに使われている「飾り」という言葉は「ズィーナ」というアラビア語ですが、その同じ「ズィーナ」は、先ほどの、「マスジドで清潔な衣服を着けなさい」という部分でも使われているのです。「ホズ」というのは「手に取りなさい(付けなさい)」という意味ですから「(マスジドで)ズィーナを付けなさい」ということになります。

野中葉 私もそれを思いました。「Take」だよなと思ったんですよ。

後藤 ですから、この二つのコーランの文章を並べて考えてみると矛盾があるように思われるのです。「外に表れるものを除いて飾りを見せてはならない」と言われながらも、マスジドは「飾りを付けなさい」とある。そうするとこの「飾り」とは何かおもしろいものが見えてくるのかなと思います。あるいはこの二つの飾りの意味について、たとえばコーラン注釈書などいろいろな本にどう書いてあるのかを比べてみると、おもしろいのかなと思いました。

■ ウズベキスタンのヒジョブにみる トルコからの影響

帯谷知可 まずトルコとの比較についてですが、ウズベキスタンだけではなく旧ソ連圏のイスラーム地域の問題は、おそらくトルコと比較するとかなりおもしろいのではないかと私も思っていました。旧西側と東側、資本主義世界と社会主義世界という違いはあれ、おそらくかなりヨーロッパ的な文脈で近代化としての世俗化を経験したその後の問題として考えると、比較の観点ができるのかなと考えたりしています。

具体的に、これも実際にはまったく確認できていないのが現状なのですが、ウズベキスタンのヒジョブはトルコからのかなり実際的な影響があるようです。大型の資本が入ったという感じではおそらくな

いですが、イスラーム風のファッションを専門にするトルコ資本のブティックがいくつかあったという話は聞いたことがあります。スタイル的にも、現代トルコ風の着け方が模倣されていたのかとも思います。

■ イスラーム・アカデミーと イスラーム文化センター

帯谷 和崎さんからのご質問については、残念ながらきちんと答えられることが現時点では一つもないのです。わかる範囲でお答えしますと、イスラーム・アカデミーは、現在まさに設立準備中ですね。おそらくウズベキスタンに由来する世界に誇れるイスラーム的遺産をより外に見せて、イスラームの文脈でも国際交流をし、また自前のイスラーム学者を養成する必要性が背景にあるのかなと見ています。一方で、宗務局の周辺地域を大々的に改修・再開発したりもしているようで、古い建物がどんどん壊されているような状況を若干冷ややかに見ている人もいるのかなという印象です。

旧市街に今度できるイスラーム文化センターには、ネットで模型を見ただけですが、生まれたばかりの赤ちゃんが宙に浮いているような大理石像をシンボリックに設置するようです。これは生まれたばかりの預言者を表したものだそうです。こんな具象物を造っていいのかな、とちょっと思ったりもしますし、一部で議論になっているようです。

■ 女性のイスラーム知識人の現状 宗務局と警察とのリンク

帯谷 それから女性のイスラーム知識人たちはヴェール問題について何を言っているかということですが、これも現状では私には手の届かない話です。概してウズベキスタンでは女性のイスラーム知識人の発言などが表に出てくるのがほとんどないですよ。ヴェールについて公に語られていることは、ウズベキスタンの場合にはほぼ100パーセント男性の言説だと思えます。それを深く掘るためには女性たちに直接聞きに行きたいのですが、オティンと呼ばれる女性イスラーム知識人たちも現在は立場がよくなったりしているようです。ですから、これも今後の課題とさせていただきます。

それから宗務局が出すいろいろなファトワーやイマームらの発言と警察がどのぐらいリンクしているかという話ですが、直接リンクしているかどうかは定かではありません。が、宗務局を管理・監督しているような役所と警察は当然つながっているでしょう

から、そのあたりがきつとすべて連動して動くのだと思います。基本的には宗務局は政権側の公式見解を追認するような形でしか動きませんし、現在のところ自立性は発揮できないのが現実だと思います。

■ ヒジョブや結婚式をめぐる上からの指令と「イスラーム的」の範囲と意味

帯谷 また、ヒジョブに関して大統領令があるかどうかについては、ウズベキスタンでは大統領令や閣僚会議決定が法律同様の力を持ちますが、それらは今回チェックできていませんでした。ご指摘ありがとうございます。ただ、情報としても現在のところそういうものがあつたとは了解していません。

結婚式を豪華にやるなという指導は、これは近代化の過程でずっと言われてきたことですね。「結婚式を派手にやるな」、「お金を使うな」、「持参財を小規模にしろ」、「持参財をやめろ」等々、19世紀末ぐらいから、近代化を目指した現地の知識人たちも主張し、ソ連時代も、独立後も、現在もたびたび為政者たちが言っていて、1世紀以上ずっと続いている議論だと思います。

後藤さんからいただいた質問については、「イスラーム的過ぎる」というのはレジュメを書いていて思いついた表現ですが、ウズベキスタンにとって好ましい程度に「イスラーム的」だという範囲から外れているという意味を持たせています。ウズベキスタンにとってはあまりよくないものがそこに見えているというイメージでしょうか。外来の要素がすごく透けて見えているというような、そういうイメージで私は使いました。ちょっと筆が滑ったところもあるかもしれません。

後藤 じゃあ悪いイスラームということですね。

帯谷 そうですね。ウズベキスタンにとっての悪いイスラームですね。

■ グローバル時代のハラール規格をめぐるインドネシアとマレーシアの競争

野中 粕谷さんにいただいたお話で言えば、グローバル化している世界の中に位置づけるべきだというのはまさにそのとおりです。ハラールについて言えば、ハラール規格という側面で見れば圧倒的にインドネシアはマレーシアに負けていて、マレーシアのほうがハラール規格は先行してきちんと整っています。インドネシアはお隣でもあり、そこになんとか追いつこうということがあつて思っています。

お話ししたように、インドネシアはこれまでずつ

と8割から9割の人がイスラーム教徒です。マレーシアの場合は人口の6割ぐらしかイスラーム教徒がいなくて、中華系の人とインド系の人と交わって生活しているので、すべてのものがハラールなのかどうかをすごく気にする。中華系でビジネスをしている人にとつても、ハラールマークが付いていたほうが自分たちのビジネスがしやすいということがあつて、ハラール規格がすごく醸成されていつたと言われています。

一方で、インドネシアはもっと緩いわけですね。「流通しているものすべて、豚なんか入っているわけないじゃん」というのがそもそもの感覚です。ただし、急速にグローバル化していく中で今後どうしていくかについては、グローバルに見ていく必要があるとたしかに思っています。

ただし、マレーシアに規格で負けている反面、服も、本日お話しした化粧品のWARDAHもマレーシアにはすごく輸出をしていて、インドネシアの人たちは「インドネシアのほうが実際のマーケットでは勝っている」という自負はあるかと思つています。

■ 「見せるため」の服装をした女性にもイスラーム的な理由づけが見られる

野中 粕谷さんにいただいたコメントで、「まさに見せるためにファッションをやっているじゃないか」というのは、そのとおりだとも思つる反面、そういうものすごく派手というか、見せるためにやっているだろうという服装を着ている女性たちも、聞いてみるとイスラーム的な理由づけをしてくる。私はそのことがおもしろいなと思つています。

単に流行を追っているということではなく、「社会の中でイスラーム的であることのほうがいい」みたいな——その「イスラーム的」がどのようなものかということとはインドネシアの場合はすごく多様ですが、とにかく「イスラーム的なことのほうがイスラーム的でないものよりもいい」という価値観は、ものすごく作られています。すべての言動、あるいは生活の中でのあらゆることが、イスラームの理由づけを元に行われる。「何が正当か」みたいなことがある一方で、すべてのことをイスラーム的に理由づけしていくということが、現在のインドネシアで起つている一つの大きな事象なのではないかと思つています。

■ 宗教権威が一枚岩ではなく

イスラーム的規範が溢れているインドネシア

野中 和崎さんからご質問いただいて、本日は思想潮

流のことをきちんとお話しできていませんが、ダアワ運動は一義的にはムスリム同胞団系の思想だと言われてきています。しかしこれも多様ですので、ダアワをしている人の中には、ヒズブ・タフリース系の人ももちろん入っていたし、インドネシアでは特に学生運動なんかではヒズブ・タフリースとムスリム同胞団系の思想が混在化しているみたいな話もあって、ここはきれいに切り分けられる話でもないかもしれないと思っています。

それから、本日出した美や化粧に対する言説は、かなりざっくりとまとめ過ぎていて、まさにご指摘いただいたとおり、『女性』という本を書いたM. Quraish Shihabさんと『さあ、ヒジャーブを着けよう』という本を書いたFelix Y. Siauwさんとは、まったく違う思想潮流の人なんですね。細かく見てみれば、「メイクをしてもいい」とM. Quraish Shihabさんは一方で言っていて、『さあ、ヒジャーブを着けよう』のヒズブ・タフリースのほうは「顔のメイクはしないほうがいい」と書いていて、かなり違ってきます。

いまインドネシアは、イスラーム的規範のショーケースみたいなことになっていると私は思っています。ウズベキスタンやトルコとは大きく違うのかもしれませんが、宗教権威がまったく一枚岩ではないのです。たとえば服装の条件、あるいは美に対する考え方みたいなその条件について、さまざまなウラマーがいろいろな意見を出してきています。実際の人びとは、自分の信仰心と、自分がやりたいことによって、どの人の意見を取り入れるかみたいになっている。「私はこの本を読んでいるのよ」、「私はこの条件で、この服装を着ている、こういうメイクをしている」みたいにして規範を取捨選択していることがあるのかなと思っています。

最低限の規範として、化粧品はハラールなものを選ぶべきだという意識は強まっています。しかし、たとえば本日お話ししたことで言えば、ハラール認証があるべきなのか、なくてもいいのか、何を「tabarruj、飾り立てる」と言うのか、何を目立つと考えるかみたいな実際のレベルに落ちたときには、ものすごく多様だということもまた一方ではあります。それ自体も民主化以降のインドネシアの特徴なのかなと思います。政府はどうしているのかというと、民主化以降はまったくそういうものを統制するつもりもないですし、統制もできないので、宗教権威がそれぞれに意見あるいはファトワをそれぞれに出して、

それぞれの人びとがそれを取捨選択できる状況になっているということだと思っています。

それから後藤さんのご指摘は非常におもしろくて、何をジーナとするかを考えるというのもそのとおりだし、インドネシアの側面で言えば、インドネシア人の多くはアラビア語を解さないの、どのようにそれがインドネシア語に訳されているのかということもワンクッションあって、本当にその点ではこういうものを見ていくと非常におもしろいと私も思っています。

また、日本人の研究者で、アラビア語がたどたどしい私などが日本語訳を見せると、それも違う誤解を生むということもあって、非常におもしろく、また難しい問題かなと思っています。

司会 ありがとうございます。フロアのみなさんも聞きたいことがあってうずうずしていらっしゃると思いますので、いかがですか。

■ 東洋学をどう理解するか——

ロシア帝国の東洋学とポリシェヴィキの東洋学

磯貝真澄 たいへんおもしろいお話をお聞きして、参加してよかったと思っています。帯谷先生が「植民地主義的ダイコトミーの継承と権威主義体制」のところでお話くださったところが、じつは私もすごく関心を持っているところです。この議論とライラ・アハメドの『イスラームにおける女性とジェンダー』の中で議論されているようなことを合わせて、さらに全体をどう考えるかという問題を見たときには、やはり東洋学をどのように理解するのかという話にどうしてもいくと思うのです。

現在オランダにいる研究者で、ドイツ人のミヒャエル・ケムパー (Michael Kemper) という、北カフカースのダゲスタンとヴォルガ・ウラル地域のタタールなどのムスリムを研究している人がいます。彼はテュルク語史料の研究者というよりもアラビストかなと思いますが、つまりドイツのイスラーム学的な知識を持って研究している人です。このミヒャエル・ケムパーが、ここ数年ロシアとソ連の東洋学史を研究してまして、まあまあ衝撃的なものですが、「赤いオリエンタリズム (Red Orientalism: Mikhail Pavlovich and Marxist Oriental Studies in Early Soviet Russia)」というタイトルの論文を書いているんですね。

細かいことをはずしてざっくり申し上げますと、ケムパーが言っていることは、エドワード・サイード

が批判したような特徴を持つ東洋学というのはロシア帝国の東洋学ではなくて、むしろソ連が、ポリシェヴィキが構築した東洋学なんだということです。そのこと自体は、じつは私も少しロシアの東洋学史に興味を持って多少調べ始めているのですが、大枠においては、私自身もケムパーに同意するんですね。

つまり、帯谷先生がおっしゃったナリフキンなどを含むロシア帝国の東洋学者は、もちろん現地の研究対象の人たちを、わりと上から目線で見える人もいたけれども、そうではない人もいた。比較的現地の人々に寄り添うようなタイプの人たちが、ロシア帝国の東洋学者にはいたわけです。ポリシェヴィキはそれをムスリム地域の統治に利用するために、言論の自由に規制をかけていく中で、ソ連体制に協力的な東洋学者というものを制度的に編成していった。そういう体制ができあがっていく中で、フジムの問題という話になってくると思えました。私も関心を持ち始めたところですので、ざっくりと見通しとしてそういう感じのことなのかなと思っています。

■ ソ連的価値観を身に付けたことを誇る世代と 宗教的感覚を大切にす世代との緩やかな対立

磯貝 そういう構造があったところのソ連解体後の現在の話として考えるときに、緩やかな世代間対立みたいな感じの問題があるのではないかなと思っています。それは、自分の数少ない知り合いの中での話ですが、たとえば私が留学していた時の指導教官のタタール人の先生は、つまり、中央アジアとの文化的共通性を持つヴォルガ・ウラル地域出身の、カザン大学の先生なのですが、もう80歳になる女性の先生です。その先生はソ連的な価値観を身に付けた自分というものに対する矜持を持っているというタイプなんですね。家系的にはムスリムの家系に生まれたけれども、世俗的・科学的な価値観を身に付けて、ロシア語もロシア人よりもきちんとできるようになる、そういうことにすごくプライドを持っている先生なんです。

一方で、若い世代のタタール人やバシキール人は、イスラームの信仰をもう少し大事にしようといったことを考える人たちが、とくに1990年代以降になって出ています。上の世代の人たちはソ連人的であることに對してプライドを持っていますが、いまロシアの若い世代の価値観が、ムスリムだけではなく正教徒もそうですが、「信仰を持つ人間のほうがアテイストよりも道徳的にまともである」という方向になってきている。とくにインテリであれば、あるべきインテ

リの姿として「宗教的感覚を持っているほうがまともである」という見方がどんどん広がっている。最近ですと50歳代ぐらいまでそれが広がっている感じです。私の指導教官の先生ですらも、昔みたいにイスラームのことを「古くさいこと」みたいなニュアンスで語らなくなってきているという状況があるんですね。

それでも、そこで観察できる状況は、私の指導教官の先生が若い世代のことを、そういう意味において「価値観が違う」と評したり、あるいは特にスカーフをつける若いタタール女性について「タタールの伝統的な格好ではなく、エジプトなどの影響なんじゃないか」と言ったりして、その一方で若い世代の人は「上の世代の人は、ああいう感じだからね」といった語り方をするというものです。どういう人間であるべきかということについての、緩い世代対立みたいな状況が、私はあるのかなと思っています。かなり穏やかなものですが、そういうところがウズベキスタンでもあるのかどうかおうかがいしたいと思います。

後藤先生と野中先生にも同じように、そういう意味での緩い世代間対立みたいな感じで、社会主義・共産主義的な感覚に対するシンパシーを持たなくなったら宗教に行く、といったような状況がないのか聞いてみたいと思います。エジプトでもインドネシアでも、その権威主義体制は20世紀のある時期にソ連の影響を強く受けていたので、そういうところがないのかお聞きしたいと思います。

■ ソ連時代の東洋学のほうが より植民地的だった可能性

帯谷 私も帝政ロシア時代の東洋学は中央アジアの民族誌やイスラーム研究に関わるような部分を少し見えています。ライラ・アハメドは、フェミニズムの隆盛が植民地主義に非常に有効な言語を与えたと言っていますが、ちょうどその同じぐらいの時期に、やはりイスラーム学が帝政ロシアで大きく発展している。初めてのクルアーンのロシア語訳、アラビア語から直接ロシア語に訳されたものが出版され、その頃イスラームについて語る人たちがほぼ皆そのロシア語訳を使っていたというようなこともあります。

実はいま一つ取り組んでいるテーマがあって、東洋学の知識が少しあるロシア人や、あるいはロシア語でものを書いていたヴォルガ・ウラル地域やその周辺地域の人たちの中に、イスラーム世界やムスリムについて、それが本質的に遅れているとか野蛮だ

という見方を否定しようとした一群の人たちがいたようなんですね。そういうところからも、ソ連時代の東洋学のほうがより「植民地主義的」だったというのは、本当にそうかもしれないと思いました。ソ連時代に、まさに中央アジアに関わる部分で、東洋学がどのように再編されたかについては私も関心があって、調べてみたいと思っています。

■ ウズベキスタンとトルコにおける

イスラーム観をめぐる社会と世代の亀裂

帯谷 世代間対立については、現代のウズベキスタンではイスラーム観の違いをめぐる社会と国家が分断されてきたし、社会の内部でも亀裂があるのではないかと考えています。それはいろいろなレベルであると思いますが、50歳代後半から60歳代以上ぐらいの都市のインテリなどでは、イスラームだけでなくあらゆる宗教に対してアレルギーのようなものを持っている人も多く、そういう人が、イスラームに敬虔な思いを持っている人の前で、「宗教なんていうものはすべてだめだ」というようなことを言ってあやうく争いになりそうな場面に遭遇したこともあります。同じウズベク人同士の間での世代間の価値観の違いは潜在的に深刻な問題としてあると思います。

2016年にカリモフの死によって長期政権が終わり、新政権になってから、緩やかに起こってきている、どこか自由になってきているかなと感じるようなことの一つは、おそらく今50歳代以下ぐらいの世代の人たちが実権を持つ年代になってきて、「やはりイスラームは大切」ということを少しずつ認識し表現し始めているのではないかと考えています。たとえば、故カリモフ大統領が危篤状態のときに、宗務局長がやってきて祈祷をしたら奇跡的に持ち直した、という経緯について、カリモフの次女がSNSでえんえんと書くというようなことがあって、「やはり信仰を持つのは大事なことなんだ」と思う人たちが、いろいろところでじわっと増えている印象は本当にあります。

司会 トルコの場合は世代差もですが、階層差が効いているという印象があります。あとから豊かになった地方出身の人たちがイスラーム的な価値を自分たちのアイデンティティとして強調するという議論もあるようです。粕谷さん、いかがでしょう。

粕谷元 いろいろなレベルがあって、階層も一つです。世代もそうだと思います。受けた教育がやはり大きいでしょう。

■ ライラ・アハメドのカーシム・アミン批判に見る誤認と誤謬

後藤 植民地主義のところで、帯谷さんの報告資料を読んで少し気になっていたのですが、ライラ・アハメドが植民地主義言説と植民地現地エリートをこういう言葉で批判しているのですが、ここにはライラ・アハメドの誤認があったのではないかと私は考えています。アハメドはとくにカーシム・アミンという知識人を批判しているのですが、カーシム・アミンはこういう文脈にとれるようなことは言っていないようなのです。イスラームについて、植民地現地エリートの考えと植民地主義言説とは、実は違うと思うのです。先ほどの「現状のイスラームが悪い」と「イスラームが悪い」という話と同じです。「悪いイスラームが悪い」という話と同じです。「悪いイスラームがいまは広がっているけれども」というのがおそらく植民地現地エリートの話で、植民地主義言説では「(そもそも)イスラームが悪い」となっていたと思うのです。

帯谷 それは重要なお指摘です。ありがとうございます。今日は触れる余裕がありませんが、「悪いイスラームがいまは広がっているけれども」というロジックは帝政期のロシア・ムスリムの間にも出てきます。

■ 階層別に見るハラール化粧品とイスラーム・ファッションの受容

賀川恵理香 先ほど野中先生から階層の話が出ました。インドネシアで高等教育がどれぐらい進んでいるのかわかりませんが、ご紹介いただいた女性たちの意識の話の中では、大学の学位を持っていたり、かなり上の階層の人が多いイメージがあったのですが、階層的に、たとえば大学に行かない女性たちや地方に住んでいる女性たち、都市の文脈ではなく違う文脈では、お化粧品をすることやハラール化粧品の需要などはどのような状態になっているのかお聞かせください。

野中 ハラール化粧品もファッションも、もっとも先駆的にしているのは都市に住んでいる教育を受けた層だと私は観察しています。それは情報を一番キャッチできるからなんですね。最初は識字率、本を読むことができるということです。1980年代にダアワ運動があったときには、本を読んで自分たちで考えることができる人、大学生になった人たちの数が圧倒的に増えた。1980年代にも権威主義体制で安定した中で教育水準が高くなっていったのですが、大学生たちの数が増えて、アラビア語から翻訳された

本や英語から翻訳された本など、さまざまなものを読む人たちが出てきて、クルアーンのインドネシア翻訳も読むということがありました。

現代ではもっと進んでいて、インターネットで情報を取ってくることによって、「何がイスラーム的なのか」とか「あのウラマーはなんて言っているの?」とか「エジプトではどういう格好しているの?」とか「ヨーロッパのムスリムたちはどんな格好をしているんだろう。どういう化粧品使っているんだろう」みたいな情報を敏感にキャッチできる層が、都市に住んでいる教育を受けた人たちだと私は定義しています。当然その人たちは、大学を出た後にもいわゆる社会人として働くわけですから自分で自由になるお金もある程度持っている人たちです。

地方の人とか中学・高校までしか出ていない人はどうかという話ですが、権威主義体制の時代には、圧倒的にそこに差があったと私は思っています。ダアワ運動をしている人たちと、そうではない人たちとの断絶がかなりあったと思います。しかし、いまこの民主化の時代になってきて、経済水準自体も全体的にボトムアップが図られていることもあるし、あとみんなスマホを持つ時代なんですね。

■ SNSの普及が進み

瞬時に誰もが情報を共有するインドネシア

野中 これは別の話ですが、インドネシアでは、中間層の人たちがものすごくボリュームがあると言われていています。「中間層の下」という人たちとか、あるいは中間層に入らない、世銀などの定義で言えば「貧困層の上」みたいな人たちですら、インドネシアでは冷蔵庫を買うより携帯買うみたいな状況で、経済的にはねじれ現象が起こっています。誰もがSNSが大好きで、本当は貧困層的な水準だろうという人たちが、みんなインスタなどで自分たちが着飾った洋服をアップする。そうすると情報は瞬時に場所とは関係なくめぐる。また、たとえば都市の、ある程度お金を持っていて社会人をしているような人たちが「いいよね」と言っているようなものが瞬時に、いわゆる経済的には下層の人たちにまで広がっていく。そのタイムラグあるいは断絶みたいなものが、この文脈ではすごく少なくなっていると私は読んでいます。

ですから、いわゆる全国的なムーブメントになるのがものすごく早い。供給側もそれに対応して、最初はハイエンドの人たち向けに出すわけですが、いわゆる庶民の人たちまで買うとなると、ハラルの口

紅も150円ぐらいで売っているし、そういうものを買うことになっているのではないかなと思います。

■ キルギスとカザフスタンにおける

スカーフ着用の実状

カリマン・ウメトバエヴァ 私の専門は民族音楽学で、宗教や衣装に関してはほとんど知識がないと言ってもいいぐらいなので、質問というよりはコメントです。私はキルギス人なので、インサイダーとして少し意見を言わせていただきたいと思います。スカーフについてです。

じつは2017年の10月に、東京にキルギスから大きな民族楽団が来て、そのコンサートで民族衣装のファッション・ショーを行いました。私も主催団体に関わっていて、民族衣装の解説を送ってもらって、それを日本語に訳すことになりました。そこにキルギスの伝統的な帽子についての解説がありました。帯谷先生はご存じかどうかわかりませんが、昔キルギス人が頭にかぶっていたのは大きなターバンのような帽子で、私は解説を翻訳しているときに知ったのですが、その解説にはまったくイスラーム的なことは書かれていませんでした。

もう一つ、とても大事なことですが、キルギスとカザフは、中央アジアの他の国と比べてイスラーム色が一番薄いと言われていています。遊牧民だったので、ターバンのような帽子をかぶっていて、たとえば赤ちゃんが生まれたときにはそれで赤ちゃんを巻いて、移動するときに赤ちゃんを守る。あるいは誰かが亡くなると、大きなターバンで遺体を巻いて土中に埋葬するときにも使ったんですね。女性が頭に着けていた帽子は、女性の階層も表していたし、女性が結婚しているかしていないかも表していたし、さまざまな情報を帽子を見るだけで得ることができたんですね。ソ連時代になって、女性ももっと社会で積極的に働かないといけないことになったので、大きなターバンが邪魔になって、先ほど資料で出たようなスカーフをかぶることになったということなんですね。

いまの3人の発表を聞いていて、「そう言えば、私の国で女性がいまでもかぶっているスカーフには、イスラーム的な意味も含まれているのかな」と思いました。たとえば私のお母さんも、いまスカーフを着けています。「お母さん、なんでスカーフ着けているんですか」と聞いても、おそらく彼女は答えられないですね。そして、おそらくイスラーム的な意味はないと思います。子どもの頃から「女性はスカーフをかぶる

ものですよ」と、おそらくおばあちゃんなどから教えてもらったんじゃないかと思うんですね。

先ほどウズベクの民族衣装の本を見せていただいたのですが、民族衣装、特に帽子は中央アジアではとても大事にされていて、民族を象徴するものです。キルギスはそういう宗教色がまったくないところなので、宗教的な要素というより、昔からの生活様式で帽子をかぶらなくてははいけなかった、日常生活でそういう形が生まれたのではないかと思うんです。スカーフを巻くことは、必ずしも宗教心を表しているとはかぎらないと思いました。

■ 買い手が成分をチェックして

ハラールの真偽を確認するインドネシア

桐原翠 私はアフガニスタンとマレーシアのことを研究しています。野中先生に一つ質問です。私は研究テーマとしてハラールを考えていて、あまり確実というわけではないのですが、マレーシアだとノンハラールを強調して商品売っていることが、すごく目立っている感じがします。インドネシアでハラール化粧品などを販売するにあたって、店全体がハラール化粧品しかないということなのか、混在しているけれども、買い手がパッとわかりやすいように販売しているのか、その点が気になったので、教えていただければと思います。

野中 先ほど映像で出したハラール化粧品は、みんなハラールマークが付いていて、売り場としては完全に混在しています。資生堂とカネボウの隣にWARDAHという並びであったりします。みんな見てわかるという感じです。「ナチュラル素材でもいい」と言っていた子たちは、ネットで買ったりしています。ネットのオンライン販売で、ingredientが細かく見られるようになってるんですね。そこで「天然素材100パーセント」と書いてあるものを彼女たちが選ぶということがあります。

桐原翠 マークが入っていないものもかなりあるとおっしゃっていたと思いますが、それは……。

野中 マークが入ってなくても、最近みんな見えています。「信用ならない。これ本当なの？」というものもネットの口コミなどで見る。化粧品もそうですしレストランもそうですが、一度信用を失ってしまうと炎上するわけです。「じつはあそこはハラールじゃなかったらしいよ」という感じです。そういうお店がネットで炎上して、それを回復するのに何年もかかったり、小さいお店は営業ができなくなった

りすることがあります。ハラールマークは必須ではありませんが、みんなその情報を主にネットで見て買っているということです。

*

司会 それでは最後に帯谷さん、締めてください。

帯谷 みなさん、今日のご協力いただき、ありがとうございました。このテーマは議論に広がりがあり、たいへんおもしろい、まだまだ取り上げる問題はあるとあらためて実感しました。来年度以降、第二弾、第三弾とこの続きができればいいなと率直に思っています。女性だけでなく、男性にも加わっていただき、若い人もおじさんも一緒に、ぜひ続きをやりましょう。どうもありがとうございました。